

自動車産業における日本企業のグローバル化と集積に関する研究：九州・山口における自動車産業集積は持続可能か？

藤川，昇悟

<https://hdl.handle.net/2324/1806805>

出版情報：九州大学，2016，博士（経済学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏名	藤川昇悟			
論文名	自動車産業における日本企業のグローバル化と集積に関する研究 —九州・山口における自動車産業集積は持続可能か?—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	山本健兒
	副査	九州大学	教授	久野国夫
	副査	九州大学	教授	清水一史

論文審査の結果の要旨

本論文は、自動車産業において立地と取引に関するグローバリゼーションを進めてきた日本企業の行動が、九州・山口での新興自動車産業集積の更なる成長あるいは維持を可能にするのかという問題を、『工業統計表 品目編』や『貿易統計』の丹念な分析、上記地域の自動車産業関連企業データベースに基づく著者独自の分析、そして企業へのインタビュー調査を用いて解明したものである。

本論文の貢献は以下の点に認めることができる。第1に、産業集積に関する欧米発の新しい諸理論と古典的理論とを比較し、九州・山口における自動車産業集積の形成を説明する理論としてはAlfred Weberの工業立地論が応用可能であることを明示した。第2に、産業集積内に立地する企業間の情報交換に基づいてイノベーションが継起的に起きるといふ新しい理論が注目する現象は、九州・山口においてまだ顕著ではなく、それ故その持続可能性を判断するためには、そこでの生産車種がどの市場向けなのか、それに変化はないのか、カーメーカーは部品をどこから調達しているのかを分析する必要があるという論理を明示し、九州・山口へのアジア諸国からの自動車部品輸入が2000年代以降顕著に増加したことを統計分析によって実証した。第3に、そこでの生産車種・モデルはカーメーカーのグローバル戦略の下で、外国子会社に容易に移管されることを示し、九州・山口の自動車産業集積に脆弱性が存在することを具体的に明らかにした。つまり、集積ありさえすれば工業が発展するという論調に対して、実態の丹念な分析によって警鐘を鳴らすという意義を持つことになる。さらに第4に、部品サプライヤーの行動は、それが置かれている集積内でのカーメーカーとの関係如何によって変わることを、九州・山口や中国長春に立地する日系部品サプライヤーからの聞き取りによって明らかにしたことも、本論文の貢献である。今後、新興のみならず伝統的な自動車産業集積へのグローバリゼーションによるインパクトに関する研究や、東・東南アジア諸国に形成された自動車産業集積に関する研究へと展開することが期待される。

以上の調査結果から、本論文調査会は、藤川昇悟氏より提出された論文「自動車産業における日本企業のグローバル化と集積に関する研究—九州・山口における自動車産業集積は持続可能か?—」を博士（経済学）学位の授与に値するものと認める。